

# 近世初期の風俗画に見える「うどん屋」について

“Udon Noodle Shops” Depicted in Genre Paintings in the Early Modern Period  
Kojima Michiro

小島道裕

はじめに

中世末期から近世初期、一六世紀から一七世紀にかけて、洛中洛外図屏風などの都市を描く絵画が発達し、都市の風俗とその変遷を知る上で貴重な資料となっている。筆者は近年洛中洛外図屏風に描かれた事物について検討を行っているが、これまであまり注目されていなかったものに「うどん屋」があり、時代の様相を示すものとして興味深いと思われた。文献史料のみでは覗きたい都市民の生業とその表象、そして時代による変遷を、絵画資料を通じて解明する試みとして、多少のまとめを行なってみたい。

## 一 「うどん屋」の表現

### 1 「洛中洛外図屏風 歴博D本」(図1)

筆者が最初に描かれた「うどん屋」に気づいたのは、「洛中洛外図屏風 歴博D本」で、展示図録『都市を描く―京都と江戸―』(二〇一二)に図

1を掲げた。「歴博D本」は、景観年代としては、遊郭が六条三筋町に描かれているので、それが島原に移転する寛永一七年(一六四〇)より以前となるが、制作年代はやや下がるかもしれない。うどん屋が描かれている場所は、左隻第一扇の下部、相国寺かと思われる大きな寺院の楼門の前である。もともと、街路の描き方はかなり抽象化されており、店門の名前も「撰津屋」「ちくぜん屋」といった、パターン化した架空と思われるものが多いため、具体的な位置の比定はあまり意味がない。洛中洛外図屏風に描かれた飲食店としては、祇園社の楼門の前には現存最古の「歴博甲本」以来、必ず茶屋が描かれているように、寺社門前の茶屋の例が多いので、そのようなイメージを踏まえて、うどん屋をここに配置したとも考えられる。

しかし、うどん屋という店舗は、一六世紀代の初期洛中洛外図屏風には見られないものである。図1に見られるように、うどん屋の看板は個性的なもので、軒に突き出した棒の先に、右から「うとむ」と書かれ、下に何本もの細長い物が垂れ下がった形状をしている。このうどん屋で

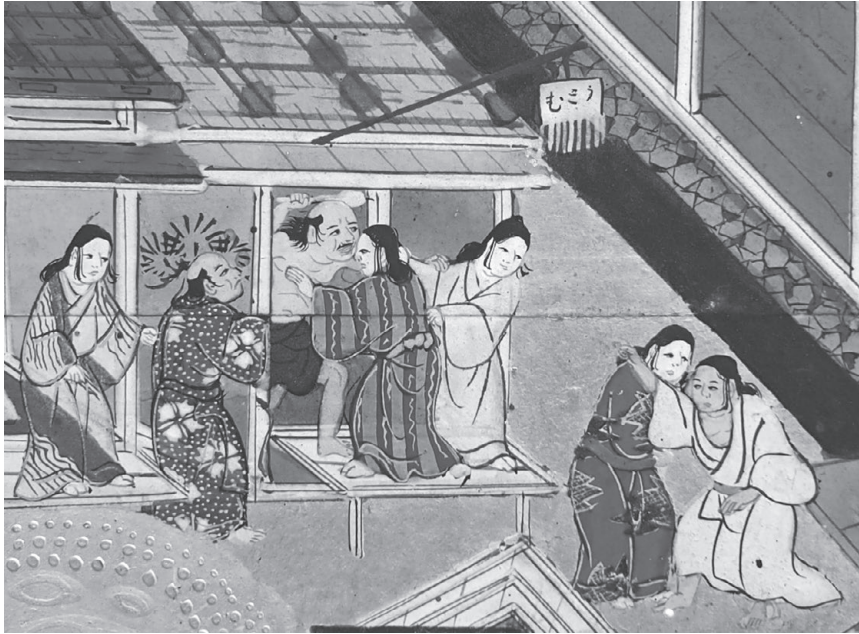


図1 洛中洛外図屏風「歴博D本」のうどん屋(左隻第1扇下)  
国立歴史民俗博物館蔵

は、店の中で半裸の男が杓子を振り上げていきり立ち、外では険しい顔の女が男を指さす。そして数名の男女が双方をなだめている。おそらく夫婦喧嘩を描いているのであろう。<sup>(4)</sup>  
以下、うどん屋と、このような図像に、どのような背景があるのかを考えてみたい。

## 2 「洛中洛外図屏風福岡市博本」(図2)

まず、他の絵画に描かれたうどん屋の図像を紹介したい。この特徴的な「うどん屋」の看板は、都市風俗を描いた絵画の中かなり認められる。最も古いと思われるものの一つは、図2の洛中洛外図屏風「福岡市博本」<sup>(5)</sup>で、狩野永徳の後を継いだ狩野孝信(一五七一〜元亀二)頃(一六一八〜元和四)の作と考えられ、慶長年間(一五九六〜一六一五)半ばころの制作とされている。<sup>(6)</sup> 店の中では女性がうどんを伸ばし、男性

図2 洛中洛外図屏風「福岡市博本」のうどん屋(左隻第1扇)  
福岡市博物館蔵

の客が腰掛けて食している。その左上、店の軒先には看板が下がっているが、横長の板の下に多数の糸状の物を下げた形状は「歴博D本」と基本的に同じであり、これが「うどん屋」を示すサインであったことがうかがえる。店の外の路上では、半裸の男が棒を振り上げて、道に尻餅をついた子供を打ち据えようとしており、女性がそれを止めに入っている。男が持っている棒はうどんの生地を伸ばす「のし棒（麵棒）」と思われ、この男がうどん屋の主人であろう。うどん屋の主人は、ここでも粗暴な人物として描かれている。

### 3 「築城図屏風」(図3)

「洛中洛外図屏風 福岡市博本」と並んで最も古いうどん屋の図と思われるものに、近世城郭の築城風景が描かれた絵画として名高い「築城図屏風」(六曲一隻、名古屋博物館蔵)がある。制作時期は、慶長年間(一五九六～一六一五)の中頃ないし末期ごろとされ、慶長一二年(一六〇七)築城の駿府城を描くとする説がある。いずれにしても、江戸時代の初頭、盛んに城下町建設が行われていた時代の風俗が描かれていることは間違いないだろう。

その第三扇中程、築城工事の場面に面して三軒の店屋が描かれているが、いずれも飲食店で、うどん屋、餅屋、飯屋とみられる<sup>(7)</sup>。うどん屋には、軒先に「福岡市博本」と似た看板がかかり、板の部分は幅がより細く、糸状の部分が大きい。店内では、半裸の男がのし棒で生地を伸ばし、その右では朱色の椀を手にした男がうどんをすすっている。

見世棚には、外が黒で内側が朱の椀や、全体が朱の椀、盆が重ねて置かれ、栓のある樽もあるので、酒も売っていることを示すのだろう。なお、店の前では喧嘩が起っており、ここではうどん屋の主人自体は暴力的ではないが、暴力を描く絵の、その場面と近い位置に描かれている。

図3 「築城図屏風」のうどん屋(第3扇中)  
名古屋博物館蔵

#### 4 「池田本」系洛中洛外図屏風

「池田本」として知られる林原美術館所蔵の江戸時代初期の洛中洛外図屏風、およびそれと同じ工房が制作した洛中洛外図屏風は、看板類に比較的関心が高く、うどん屋の看板については、次の三例を検出できた。

##### ① 「島根県立美術館本(誓願寺本)」(図4)

元和年間(一六一五～二四)中頃の景観とされる「島根県美本」には、右隻第二扇、五条橋東詰にうどん屋がある。橋に一番近い店に、多数の紐状のものを下げたうどんの看板が掛かり、その左の店には、やや見えにくいのが、後述する酒林と狭匙型せつかの味噌の看板がある。このあたりにそのような酒食を提供する店があったことを示唆していると思われる。

##### ② 新出個人蔵本(狩野二〇〇七が紹介)

元和六年(一六二〇)六月の徳川和子入内の様子を描き、それより大きくは遅れない時期の作品と見られる。

この屏風にも、①と同じ右隻第二扇の大仏の手前、五条橋の東詰あたりに同様の看板が描かれている。一階の軒下にこの看板が見られる他、その上には棒に付けられた酒林もあり、見世棚には植物が飾られ、店内には重ねられた盆の上に椀が並んでいる。右隣の店も飲食を提供する同様の店舗と見られ、中では四人の女性が客引きを行っており、遊女を兼ねていると見られる〔狩野二〇〇七〕。

##### ③ 「池田本」(東博二〇一四など)

景観年代は元和年間(一六一五～二三)ころとされる。右隻第一扇の中ほど、竹田から川を渡った所にある店の軒先に、①・②と同様に白色で形が描かれた、うどん屋と見られる形状の看板が下げられている。

#### 5 「遊楽図屏風(相応寺屏風)」(図5)

うどん屋の光景を最も詳細に描くものは「相応寺屏風」として知られる、徳川美術館所蔵の遊楽図屏風である。妓楼遊楽図の初発的な作品と

図4 洛中洛外図屏風「島根県美本」のうどん屋(右隻第2扇中上)  
島根県企業局蔵、島根県立美術館寄託

して名高いこの屏風には、遊里と思われる町並みの一画にうどん屋が描かれている。絵の制作時期は、寛永年間（一六二四～四四）頃とされており、そのころの風俗と見てよいだろう。

店の中では、主人が上半身裸でうどんの生地を伸ばしており、その傍らでは四人の客が漆塗りの椀に入ったうどんを食し、めいめいの盆の上にもうどんが入った椀がもう一つ置かれている。客の上に描かれた軒先の部分には、鶴丸の模様を染め抜いた暖簾に囲まれてやや分かりにくいのが、「福岡市博本」「築城図屏風」と同様の、板に多数の糸状の物を垂らした看板が掲げられている（図9―③）にトレース）。板の部分には紅白の四角が描かれており、この部分の模様が店の固有の印なのだろう。

もうひとつ注意されるのは、うどん屋の看板の上にさらにサインがあることで、木の枝を組んだ先には、中央部分を括った形の酒林があり、その下には、ヘラ状のものが下げられ「みそ有」と書かれている。これは播り鉢から中の物を掻き出すのに用いられる「せっかい（狭匙、切匙）」の形であり、味噌を連想させる物として味噌屋の看板に使用されたもので、絵画資料の例は他にも多い。<sup>(9)</sup> 酒と味噌は、共に醸造によって作られるものであるから、一つの店で扱う必然性があり、さらにそこでうどんも提供する、という業態であったことが分かる。当時のうどんの汁は、醤油がまだ普及していないことから、基本的に味噌味であったと考えられる。<sup>(10)</sup>

また、狭匙の柄の部分のまわりには円形のもものが描かれているが、これは酢の看板として用いられたものである。<sup>(11)</sup> 酒から酢が作られるので、それも販売していることを示している。<sup>(12)</sup>

## 6 「江戸図屏風」(図6)

「うどん屋」の看板は、將軍徳川家光（在位一六二三～五一）の事績を描き、明暦の大火（一六五七）以前の江戸を描く数少ない絵画として知

図5 「遊楽図屏風(相応寺屏風)」のうどん屋(右隻第4扇) 徳川美術館蔵

られる、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」にも頻出しており、七軒を数えることができた。

① 不忍池(図6-1~4)

右隻第五扇の下方、不忍池の南には、道の両側に計七軒の店舗が描かれており(図6-1)、図の右方にある寛永寺の参詣客や遊覧客に飲食を提供する茶店的なものと思われるが、この七軒の内、三軒にうどん屋の看板が掲げられている。向こう側の五軒の両端と、店内は見えない手前側の一軒であり、いずれにも竹竿で掲げられたうどん屋の看板が認められる。

店内も描かれた向こう側の店についてさらに詳しく見ると、右端の店(図6-2)の内部には、うどんの生地と「のし棒」が描かれ、うどん屋であることが明示されている。見世棚には生け花と徳利が椀に似た黒い物、および角樽が描かれており、酒も出す店である。

向こう側左端のうどん屋(図6-3左)には、店内に黒い角盆に乗せた赤い椀状の食器二つと小皿があり、見世棚には同様のセットと花器が描かれている。

その右隣の店(図6-3右)は酒林を掲げており、店内には徳利と角樽、見世棚には、赤い盃と、中が赤で外が黒の塗椀も描かれている。酒と、おそらくうどんなどの食事も提供する、同種の店であることが分かる。

その右、向こう側五軒のうち中央の店(図6-4左)は、看板はないが、内部と見世棚には盆に載った赤い塗椀状の食器二つと小皿があるので、やはり飲食を提供する店である。<sup>(13)</sup>見世棚と入口の柱には、花が飾られている。

その右、すなわち右端のうどん屋の左隣(図6-4右)は、黒と緑で描かれた箒状の看板が出ているが、見世棚と店内には、盆に塗椀状の食器二つと小皿が載ったものがあるので、これも同様の茶店であろう。箒状の看板は、酒林は「酒箒」とも呼ばれるので、その一種と見てよいだ



図6-1 不忍池畔の茶店群 ○印がうどん屋の看板(右隻第5扇下)  
「江戸図屏風」国立歴史民俗博物館蔵(図6は以下同)

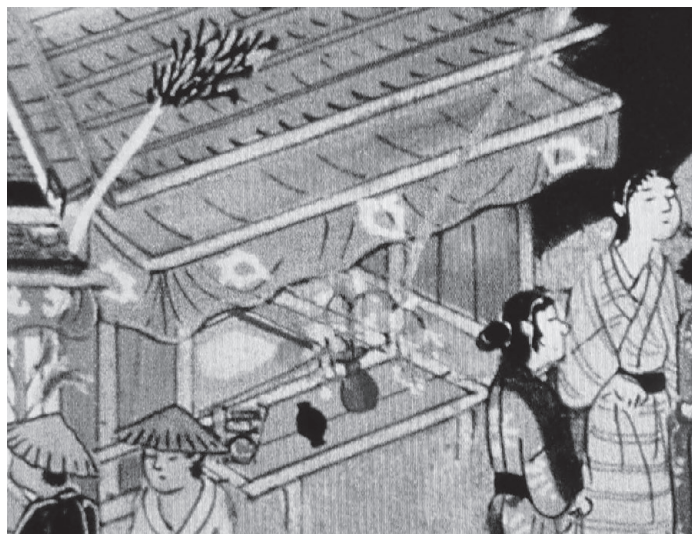


図 6-2 不忍池畔の茶店①(向こう側右端のうどん店)

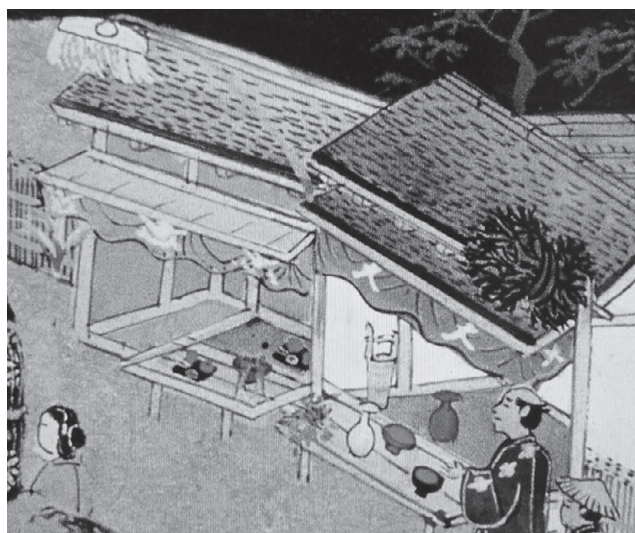


図 6-3 不忍池畔の茶店②(向こう側左端のうどん店(左)と酒店(右))

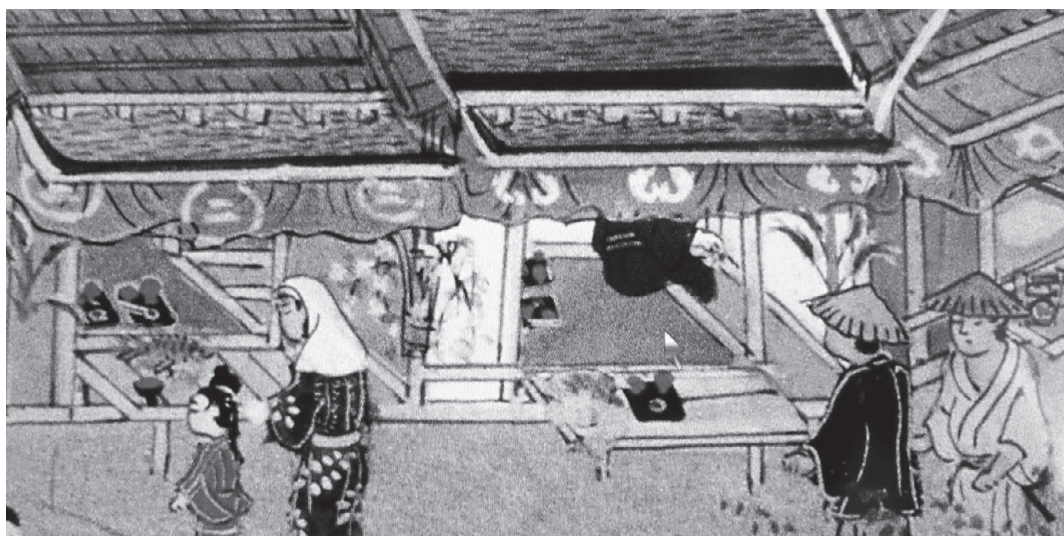


図 6-4 不忍池畔の茶店③(向こう側右から二・三軒目)



図6-5 神田のうどん屋① 看板と酒・味噌店(左隻第一扇中下)



図6-6 神田のうどん屋②(左隻第一扇下)

ろう。

② 神田付近(図6-5、6)

うどん屋の看板は、普通の町人地にも描かれている。左隻第一扇の下部、日本橋から右すなわち北に進んだ神田付近に当たるが、日本橋通の上(西)と下(東)に一つずつ、うどん屋の看板が認められる(図6-5・6)。上の方は、通りの向こう側の角に酒林と「みそ有」の狭匙型の看板を掲げた店があり、その下方、斜め向かいに相当する家から、うどん屋の看板が竹竿に付けて掲げられている(図6-5)。別の店ではあるが、うどん屋が酒・味噌の店の近くに描かれていることは、これまで見たような関連性に基づくものだろう。

③ 運河の河岸(図6-7)

神田付近のもう一つの店は、その下方、日本橋通りから金雲をはさんで一つ下に描かれた通りに描かれており、「鹿島の事触れ」が門付けをししている店に、竹竿に付けた看板が掲げられている(図6-6)。店には簾がかかっている様子も描かれていない。近くに描かれている他の店は、紙屋や両替屋と思われるもので、飲食店街的な所ではない。<sup>(14)</sup>

左隻第二扇の最下部右側、日本橋の右下の方、運河に面した河岸に、竹竿の先に二つ並んで高々と掲げられた看板が認められる。店舗の内部分からないが、この付近にうどん屋が複数あることを示そうとしたものだろう。なお、その左には、酒林を掲げた店が二軒描かれている。



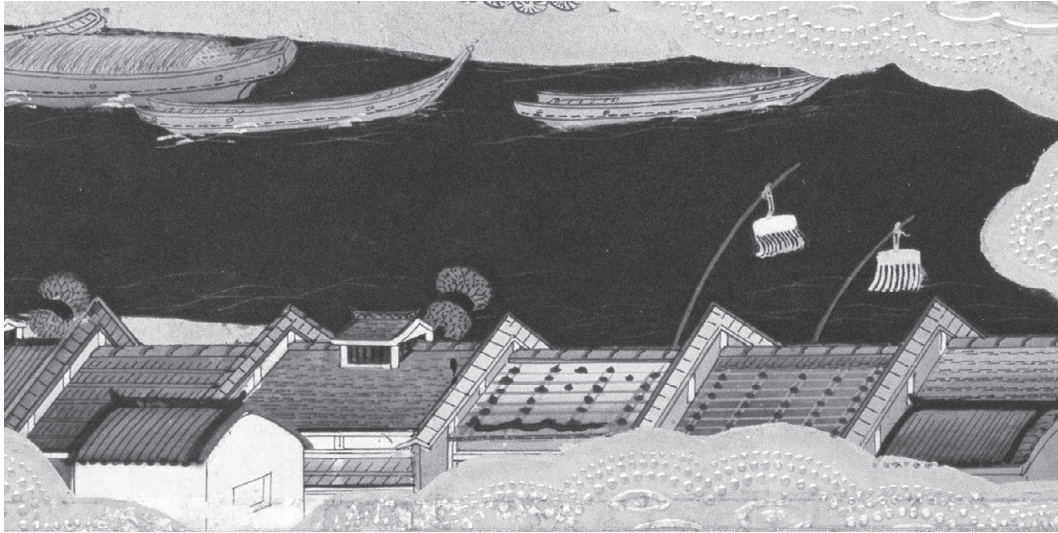


図 6-7 河岸のうどん屋看板 (左隻第 2 扇下)

#### 小括

近世初期の風俗画に描かれたうどん屋について、およそ次のようにまとめられる。

時期としては、慶長年間（一五九六～一六一五）の中期ころ、すなわち一七世紀ごく初期から現れ、元和（一六一五～二四）から寛永（一六二四～一六四四）ころの作品に多く見られる。<sup>16)</sup>

店の立地としては、寺社門前、遊興地、街道沿い、普請現場、河岸といった不特定多数の人間が通る場所が多いが、そのような特性のない町に、他の商職人の店と並んで描かれる場合もある。業態としては、酒屋および味噌・酢販売の店を兼ねていることが多く、またそれらが複数集まっていることも多い。

このようなうどん屋は、特定の料理を扱った「外食産業」の早い事例と言えるだろう。食事を提供する店舗としては、明暦の江戸大火（一六五七）からの復興に伴って現れた「煮売り茶屋」が注目されているが（飯野二〇一四）、うどん屋の出現と流行は、それよりも半世紀ほど早い。大火後の復興で外食産業が発達するのであれば、むしろ近世都市の建設に伴う外来人口の急激な増加自体がそれを促したと考えることができよう。「築城図屏風」の普請場の場面にうどん屋などの飲食業が描かれていることは、そのことを象徴しているように思われる。

京都、江戸、あるいはその他の城下町にしても、近世初期の都市の拡充と人口の流入・増大は目覚ましいものがあり、それまでの固定的な顧客を中心とした店舗のあり方とは、職種も営業形態も異なったものが多く現れたであろうことは想像に難くない。酒と共に簡易な食事を提供することや、また味噌を販売することも、そのような需要を背景に発生したと考えてよいだろう。<sup>16)</sup>

後述のように、京都でも江戸でも、うどん屋の個性的な看板はやがて市中から消え、街道の宿場につきものの物となっていくが、逆に言えば、

建設と拡充が落ち着くまでの近世初期の都市は、都市自体が新たな人の集まる宿場的な性格を持っていたと言えるのかもしれない。

## 二 うどん屋看板の変遷

前章では、近世初期風俗画に見えるうどん屋について紹介したが、うどん屋の看板については、看板研究の中でこれまでになりに詳しく取り上げられており、それを踏まえて、看板の変遷について触れてみたい。

### 1 坪井正五郎『工商技芸 看板考』

看板の古典的な研究として知られる坪井正五郎『工商技芸 看板考』は、うどん屋の看板についても詳述しており、それによれば、うどん屋の独特な形状の看板は、当時（明治二〇年頃）すでに東京にはなく、東海道や山道の宿場にあるものとして認識されていたという（図7）。そして、同書はさらに遡って、『江戸名所図会』<sup>(18)</sup>に板橋あたりに描かれていることを紹介した後、柳亭種彦の考証随筆『用捨箱』に紹介された事例を引いて、「此看板は元と市中でも用ゐたもので有るが追々に失せて場末の地にのみ存し今日では夫も跡を絶て宿駅を通行しなければ見る事が出来なひ様になつたのでござりませ」と結論づけている。

### 2 柳亭種彦『用捨箱』

天保一二年（一八四一）成立の柳亭

種彦『用捨箱』<sup>(19)</sup>は、うどんの看板について項を設けて、次のように述べている。

〔十五〕温飩の看板 芋川

昔ハ温飩おこなはれて。温飩のかたはらに蕎麦きりを売。今ハ蕎麦きり盛になりて其傍に温飩を売。けんどん屋といふハ、寛文中よりあれども蕎麦屋といふハ近く享保の頃までも無。悉温飩屋にて看板に額あるいひハ楕形したる板へ細くきりたる紙をつけたるを出し、<sup>(20)</sup>が今江戸には絶たり。（中略）今も諸国の海道にハ彼幣めきたる看板ありとぞ。（後略）

江戸でも、古くはすべてうどん屋で、蕎麦屋は享保（一七一六）

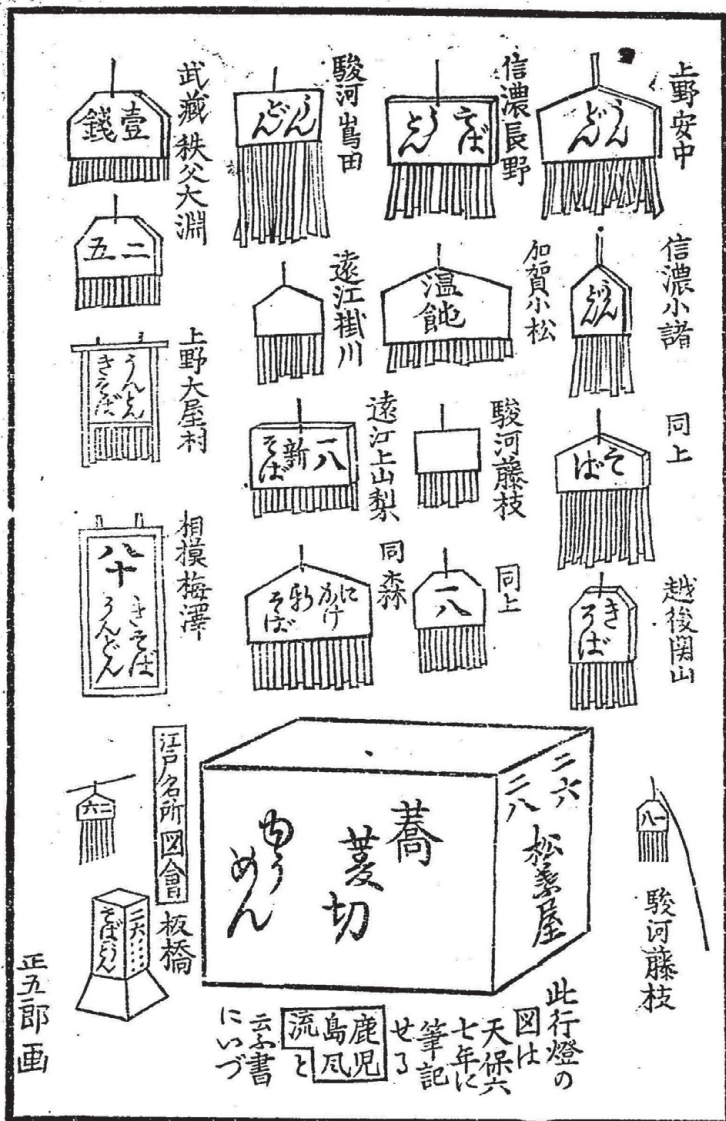


図7 宿場のうどん屋看板 坪井正五郎『工商技芸 看板考』66頁  
国立国会図書館蔵

三六)の頃までもなかった、看板として「額」や「櫛」の形をした板に細く切った紙を付けたものを使うが、これは既に江戸では絶えており、諸国の海道で見られる、と指摘している。「額」は、上部が尖り、屋根を付けた絵馬的な形状、ないしは長方形の形状で「うどん」などの文字が書いてあるものと思われ、「櫛形」は、これまでも福岡市博本や江戸図屏風で見たとような、上部がやや丸くなった比較的幅が狭いものを指すと思われる。

同書は挿絵として四つの例を挙げており(図8)、年代順に見てみたい。

① 井原西鶴『好色一代男』(天和二年(一六八二)刊)の「いも川／うむどん」の看板(図8の右上)

東海道の二川付近にあった宿場「芋川」の名物とされるうどんの看板。尖頭形で、板の部分に文字が書かれている。

② 『人倫訓蒙圖彙』(元禄三年(一六九〇)刊)「旅籠屋」(図8の右中)

「旅籠屋」の挿絵の中に「うとん／そばきり」の看板が掲げられている。板部分は長方形。①同様に宿場の例である。

③ 『道戯興』(元禄十一年(一六九八)刊)のうどん屋の図(図8の左上)

「うとん／そば切／切むぎ」と読める看板が軒下に掲げられ、店内では、押し棒で生地を伸ばす人物と、徳利、盃などと土間に竈があり、見世棚

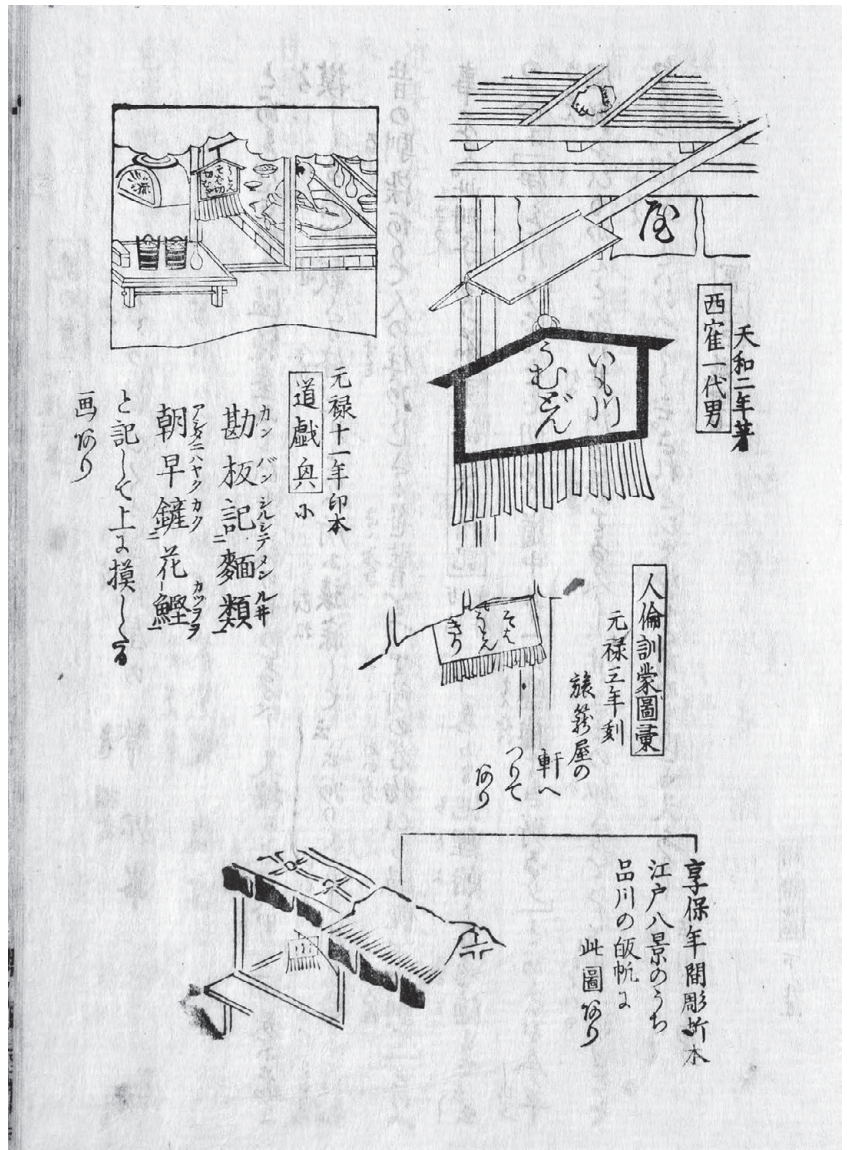


図8 柳亭種彦『用捨箱』「十五 温鈍の看板 芋川」より 国立国会図書館蔵本による

には、角樽と徳利などが置かれていて、うどん・蕎麦と酒を提供する店であることが示されている。

④ 『道戯興』<sup>(21)</sup>は、寺子屋の代表的な教科書である『実語教』のパロディー版で、当時のうどん／そば屋のイメージを描いたものと見られる。

④ 享保年間(一七二六～三三)彫折本「江戸八景の内品川の帰帆」(図8の下) 引用元の絵を特定できていないが、品川の宿場にある茶屋ないし旅籠と思われる建物の柱から、棒に付けられた看板が出されている。長方形の板に書かれた文字は略されているが、これまでの例から見ると、「うとん／そば切」などと書かれているものであろう。

以上、多くは江戸時代中期、元禄年間前後の例だが、すでに宿場の事例が多く、その頃にはすでにこの看板は宿場でよく見られるもの、という認識ができていたと思われる。洛中洛外図屏風でも、江戸中期以降の作品には、この看板は管見では見当たらない。

林美一『江戸看板図譜』は、板に糸状の物を垂らした形態のうどん屋看板について、寛延・宝暦頃（一七四八〜六三）まで上方では用いられていたが、間もなく市中から消えて行灯型の看板に移行する、としている。<sup>(22)</sup>

#### 小括—うどん屋看板の変遷

ここで、うどん屋看板の形態について編年的に考えてみたい。図9に一七〜一八世紀頃の絵画に見られるうどん屋看板のいくつかを、およそ時代順に並べたが、上辺ないし上側の両端が丸みを帯びた「櫛形」の方が古く、尖頭形ないし長方形で文字を入れた「額形」が後からきたと考えられ、江戸中期になると、後者が主流になる。また、糸状の部分は簡略化し、糸というより短冊的なものになる、という傾向が認められる。「四条河原図巻」<sup>(23)</sup>には、製麺を行ううどん屋と、祇園社門前の茶屋がうどんの看板を出している例が描かれているが、前者は板部分が細く、後者は尖頭形で板の幅が広い「額型」であり、新旧二つのタイプが店に応じて描き分けられたと見なせる。それもやがて市中では行灯型の文字看板（図7下段参照）にとって替わられ、糸状の物を下げた旧来の看板は宿場に残る、という変遷を経たと整理できよう。<sup>(24)</sup>

では、江戸時代の初頭頃に現れ、一気に全国的に広まったらしい独特な形のうどん屋看板は、どのようにして誕生したのだろうか。これについて、林一九七七は、堀越喜博『満州看板往来』（一九四〇年刊）に掲載されている中国奉天のうどん屋（「切面舗」）の看板を紹介し、また小さい四角を連ねた中国的な煙草屋の看板の例も挙げて、「日中看板考」の研

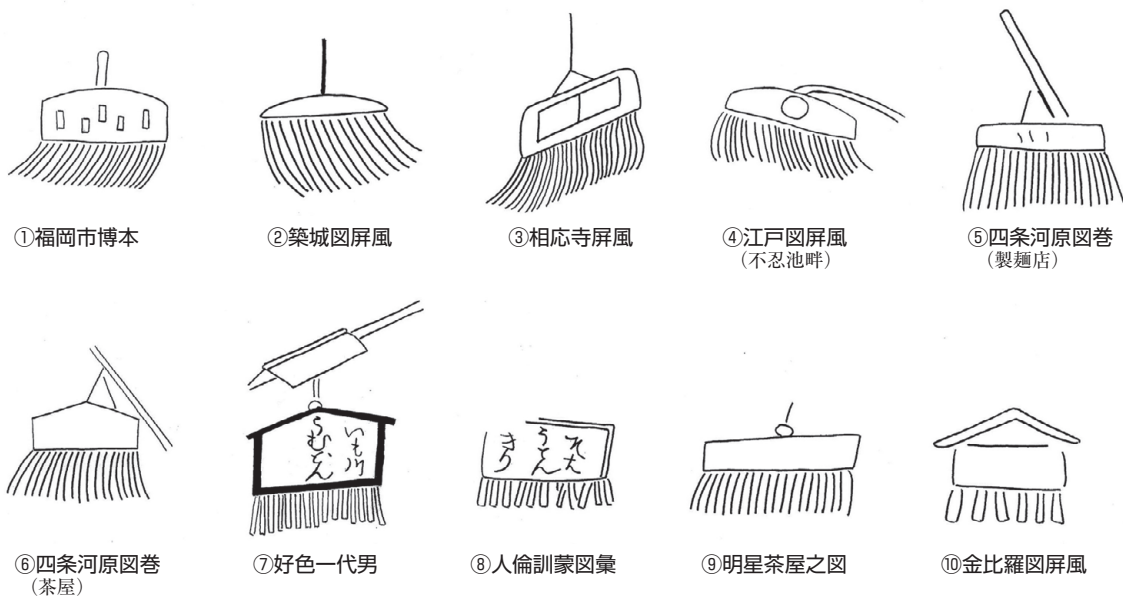


図9 17世紀～18世紀頃の絵画に描かれたうどん屋の看板 (左上から、およその編年順)

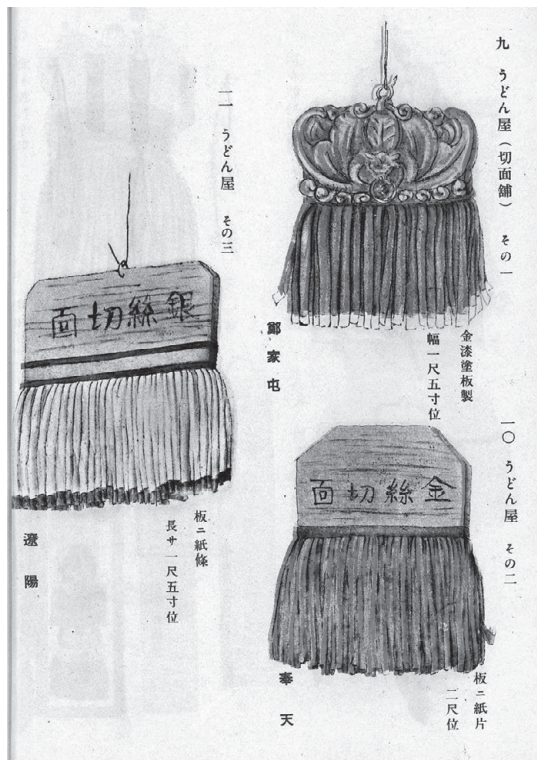


図10 旧満州地方のうどん屋看板  
堀越喜博『満州看板往来』(1940)より

究の必要を示唆している。

『満州看板往来』は、図10のように三つの事例を掲げており、板状の部分が、一つは模様(蝙蝠)の木彫り、一つは「金糸切面」、一つは「銀糸切面」(面は面の異体字で麵の意)と書かれている。(原書はカラーで、紐状の部分の色は、それぞれ、赤で先が白、全体が赤、白で先が赤、である。)

旧満州地方以外でもこの看板が使われていたかを調べたところ、二〇世紀前半の北京では、この種の看板が多数見られたことを確認できた。<sup>(25)</sup>

無論これらは近代の物であり、いつまで遡るかは不明だが、一七世紀初頭から現れ近代に至った日本のうどん屋看板と、どこかで共通の起源を持つことは間違いない。ただ、日本では、先述のように尖頭形の看板が一七世紀後半ころから現れて、江戸中期以降の主流となるが、これは日本国内で独自に進化した看板と見なせる。もっと早い時点で共通の起源があり、おそらくは、日本から中国に渡ったというよりも、中国から

日本に移入され、その後「和様化」が進んだ、と考える方が妥当と思われる。本稿では十分な検討に至らなかったが、中国などの風俗画を精査することによって、その経緯が判明するかもしれない。<sup>(27)</sup>

### 三 うどん屋と暴力

うどん屋の業態や看板の問題とは別に、もう一つ考察してみたいのは、近世初期風俗画において、うどん屋の主人が往々にして暴力的な人間として描かれていることである。

一つの理由は、おそらくその姿態にあり、半裸で「のし棒」を使い、力を込めて麵を作る、という所から、棒をもって打擲するというイメージが出てきたことは想像に難くない。もう一つ考えられるのは、新しい業種、特に食べ物屋という誰もが関わることのできる店には好奇の目が集まり、勢い偏見も生まれたのではないか、ということである。卑近な例を挙げれば、一九七〇年代にアメリカのハンバーガーショップが日本で営業を始めた際、使用している肉についてデマが流れたことを筆者も記憶している。そのような眼差しが、急速に流行し始めたうどん屋に向けられたであろうことは十分考えられよう。

そして、より重要なのは、このような暴力的場面を好む風潮が当時存在した、ということである。洛中洛外図屏風では、暴力的な場面が描かれ始めるのは、元和元年(一六一五)の作と考えられる「舟木本」からで、その後、政治的なものよりもむしろ風俗に関心のあるタイプの屏風絵では、かなりの作品に刃傷沙汰などの暴力的な場面が描かれている。<sup>(28)</sup>

特に驚くのは、宮廷絵師として活動した狩野孝信の作とされる「福岡市博本」が、路上での子供の打擲という、あからさまな暴力的場面を描いていることである。「福岡市博本」は、小ぶりな上品な「店尽し」的内容の作品で、他の事例から考えて、あるいは嫁入り屏風として作られたかと思われる作品であるが、にも関わらずこのような場面が描かれてい

るのは、時代的にそれを好む風潮があったことの表れであろう。うどん屋の主人は、そのような傾向の中で、市中における暴力的な人物像として用いられたのであろう。

冒頭に図1を掲げた「歴博D本」について言えば、企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画」（二〇一二年）で既に示したが、「舟木本」の影響が随所にかがわれ、うどん屋は、その中の「後妻打ち」の場面（図11）を踏まえているのではないかと思われる。

「舟木本」の左隻第三扇（四扇下、二条城の堀の角に描かれたこの図像は、扇の継ぎ目でかなり欠けているが、これを写したと思われる「旧萬野美術館A本」<sup>(30)</sup>によれば、打擲する人物像は図12のようであり、後妻を打ち据えている二人の内、右側の方の女性は、杓子を手に行している。「歴博D本」のうどん屋の主人が手にしているものが杓子なのは、この図像の影響かもしれない。<sup>(31)</sup>

### おわりに

一七世紀の初頭、近世都市の建設が一気に進み、その中で突如出現して東西の別なく流行したと思われるうどん屋、そしてまもなく市中を離れて宿場の風物となったうどん屋の看板は、さまざまな時代の背景を負いながら、風俗画のひとつの素材となっていた。

うどん自体の歴史については本稿では特に触れていないが、中国との交流の中で日本に定着した食べ物であることは間違いない。うどんそのものは中世から食べられているにもかかわらず、「うどん屋」が江戸時代初期になって初めて現れ、その看板もその時に中国から移入されたと思われることは、すなわち、その時点で日本の都市社会が初めて「うどん屋」を必要とするものになった、ということを意味する。

本稿は、絵画資料に見えるうどん屋の概要を示したに過ぎないが、そこから都市の社会史を考えることは可能だろう。紹介したもの以外にも

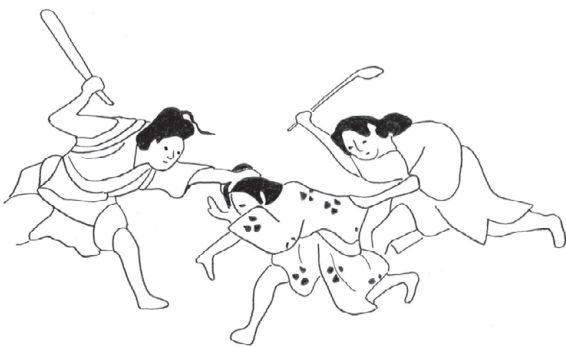


図12 洛中洛外図屏風「旧萬野A本」の後妻打  
(左隻第1扇上)

図11 洛中洛外図屏風「舟木本」の後妻打(左隻第4扇下)  
東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives

事例は多いことと思うが、ひとまずそのことを確認して、御教示を請い、後考を期すこととしたい。

註

- (1) 洛中洛外図屏風についての主な拙稿は、引用・参考文献欄に掲げた。なお、洛中洛外図屏風の成立に関わる「歴博甲本」以前の問題については、当初の見解を修正しているので、小島二〇一五をご覧いただきたい。
- (2) 国文学研究資料館と共同で行った、人間文化機構連携展示。国立歴史民俗博物館では、その第一部として、「洛中洛外図屏風と風俗画」(二〇一二年三月二七日～五月七日)を開催した。
- (3) うどんの表記として「うどんむ」は不自然ではない。初見とされる『嘉元記』では「ウトム」であり、元禄一〇年(一六九七)刊の『本朝食鑑』でも「温飽」を「俗ニ宇止牟」と訓ス」としている。
- (4) 「歴博D本」には、ほぼ同じ内容の類本が二点あり、それらにも同じ場所にこの場面が描かれているが、図様は次のように多少異なっている。
  - ① 田辺市立美術館本(旧「司馬本」「脇村本」。京都国立博物館一九九七所収) うどん屋の暖簾に「きりむ□」(切麦)と書いてある。看板から垂れる物はより細く多く、上部の板は幅が狭い。板に書かれた文字の数も多いが判読困難。男の持っているのは杓子ではなく棒。男をなだめるのは、男女各一人。
  - ② 松岡美術館本(武田他一九七八所収) 暖簾は黒い無地。看板は板の幅が広く文字も多いが判読困難。男が持っているのは黒い棒。なだめるのは男一人と女二人。
- (5) 旧称「京都染織会館本」、「吉川(親方)本」。東京国立博物館二〇一三などに収載されている。
- (6) 京都国立博物館一九九七、狩野博幸による解説。

(7) 名古屋市博ホームページの解説。同サイトでは、全体の画像と主要部分の解説が見られる。

(8) うどん屋の他、酒林や後述する狭匙型の味噌の看板、壺型の酢の看板なども相当数描かれている。酒屋が同寺に質屋を営んでいることを示す看板(図13)も見られる。

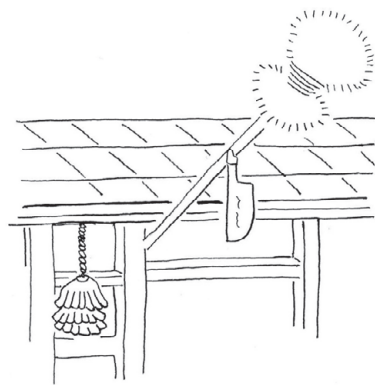


図13 洛中洛外図屏風「池田本」に描かれた酒林・狭匙(味噌)質屋の看板(左隻第2扇中下) 剥落部分は適宜復元した。

- (9) 林一九七七、立部一九八六・一九九三などの看板研究で既に注目されている。狭匙を模した看板は、時に「包丁」と誤解して解説されており、後述の江戸図屏風のものなど、たしかに包丁のように見えるものもあるが、包丁では味噌との関係がなく、意味をなさない。その形状から「うぐいす」とも呼ばれており、「相応寺屏風」の看板は、それが領ける形をしている。横井也有の俳文集『鶉衣』に、播鉢と「うぐいす」の関係を擬人化した「播鉢ノ伝」がある(大高洋司氏よりご教示を得た)。
  - (10) 前掲の『本朝食鑑』(元禄一〇年(一六九七))は、「未醬ノ水垂汁(注:いわゆる「垂れ味噌」、堅魚汁、胡椒粉、或ハ蘿蔔(注:大根)汁等ヲ用テ、温ニ乗シテ之ヲ食フ)としての。醬油が未だ使われていないことも注意される。
  - (11) なお、井原西鶴『日本永代蔵』(元禄元年(一六八八)刊)「世界の借家大将」には、播鉢で何かを播る音を聞いて「煮麵」を想像するくだりがあるので、まだ麵類の汁は味噌で作るのが普通だったことが分かる。
  - (12) 林一九七七、立部一九八六。射も的に当たらない素矢⇨酢屋の意という。曲物の底のない物を用いたと言われるが、図5の物は緑色に塗られ幅も細い。
- なお、酢の看板は、壺の形でも示される(林前掲書、立部前掲論文)。洛中洛

外図屏風「池田本」に酒林と共に描かれている壺形の看板を、「池田本」の暖簾や看板について集成した小川二〇〇五は醤油としているが、醤油の普及はもっと時代が下がり、市中の醤油屋を描いた例としては、江戸時代中期、一八世紀頃に作られたと思われる佛教大学図書館所蔵の洛中洛外図屏風（佛教大学本）左隻第二扇下の窓ないし壁面に「志やうゆふ」と書いた瓶が描かれたものがある（恋田知子氏のご教示による）。なおこの屏風には、「みそあり」の狭匙型の看板と、壺型の「す」の看板が出された店も描かれている。「佛教大学本」とその類品は京都の工房で製作されたと考えられており（大塚二〇一四）、京都の当時の風俗を取り入れたと考えたい。同本は、佛教大学図書館ホームページで高精度で閲覧することができる。

(12) 酒が容易に酔ったことについては、次の史料が知られている。

「またダミアンは、司祭が必要としたために、毎日豊後から携えて来た瓢箪に少しばかり酒を買い出しに行った。彼がそれを日々買いに行かねばならなかったのは、(酒は)翌日まで置いておくと酔ってしまうからであった。」(ルイス・フロイス『日本史』第一部二四章。一五五九年のことを書いた部分。松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』五畿内篇I(一九八一年、中央公論社) 第五章、六七頁。

(13) 「相応寺屏風」のうどん屋の客も、手に持って食べているうどんの椀とは別に、もうひとつ盆の上に椀が載っている。中にはうどんが描かれているが、各二杯ずつのうどんを出すというのやや不自然なので、本来の図像としては、ひとつは酒の杯だったのかもしれない。

(14) 「江戸図屏風」と同じく江戸時代初期の江戸を描く「江戸名所図屏風」(出光美術館蔵)も、やはり神田付近にうどん屋を描いている。右隻第四扇上部、神田明神の左、神田川沿いに材木屋が並ぶ町(内藤二〇〇三は「佐久間町」とする)に、店頭で半裸の男がうどんの生地を伸ばす光景が見られる。店内と見世棚には黒い角樽が置かれ、店の前を歩く女性も角樽を手に提げているので、この店が酒も扱っていることが分かる。うどん屋や酒屋の看板は出ていないのだが、「江戸名所図屏風」は全体に看板をほとんど描かないため、実際には「江戸図屏風」に見られるような、うどん屋の看板と酒林がかかっていたと考えてよいだろう。

(15) 元和元年(一六一五)の作とされる洛中洛外図屏風「舟木本」は、店舗の様子を詳しく描くにも関わらず、うどん屋は見当たらないのだが、当時すでにあったはずの酒林も描かれていないので、立部一九八六も指摘するように、選択の個性とみなすべきだろう。

(16) 加藤・水藤二〇〇〇は、元来自家製のものであった味噌が販売されることを都市化した江戸の特徴と説明しており、正しい指摘と思われるが、それは江戸に限った現象ではなく、大量の住民が流入した近世都市の特質と見るべきだろう。

(17) 一八八七年(明治二〇)、哲学書院刊。木村裕樹氏よりご教示を得た。著者の坪井正五郎(一八六三―一九一三)は、後にイギリスへ留学して人類学者として知られるようになるが、本書では、近世考証隨筆を多く引用し、その系譜上に著作を行っている。図版は、国立国会図書館デジタルコレクションのデータで、規定に従って著作権保護期間満了を確認した上で使用している。

(18) 文政十二年(一八二九)成立、天保五年(一八三四)・七年(一八三六)刊。

(19) 柳亭種彦「用捨箱」は、『日本隨筆大成』第一期一三(吉川弘文館、一九七五年)に収録されており、また、国立国会図書館デジタルコレクションで板本を閲覧できる。引用に当たって両者を参照した。図版は、国立国会図書館デジタルコレクションのデータを、規定に従って著作権保護期間満了を確認した上で使用している。

(20) 看板の下部に付けられた細い紙を「幣めきたる」と表現しているのは、中略部分で引用している次の例による。

打かまねくか温飴屋の幣し 撰者元峯

吉原はわざともほどく茶筌髪ちやせんかみ 嵐雪

〔桃の実〕元禄六年(一六九三)

元禄ころの吉原には、この看板を出したうどん屋があったものと思われる。

なお、「桃の実」は、芭蕉門下の俳句師桜井元峰の編者書「用捨箱」の「元峯」は「元峰」の誤り。

(21) 「用捨箱」に引用されている「道戯興」の文は、次の一部である。

「勢至は茶子の為に、口に蒲団餅をほおばる、勘板に麵類を記して、朝に早く花鑿を鑿か、壁を踏まえて山葵を鉤す」(原漢文)

(22) 市中から消える年代の具体的な根拠は挙げられていないが、同書に挙げられた市中の看板の例としては、寛文年間(一六六一―七三)頃の風俗を描くとされる「四条河原図巻」(『近世風俗図巻』第二巻所収)や、西川祐信(一六七―一七五〇)の逸題絵本挿絵がある。

この他、管見に入った、板に糸状の物を垂らす看板の例を二件加えておきたい。

「明星茶屋之図」(英一蝶筆、個人蔵)

一七世紀後半の作とされ、伊勢国多気郡上野村(現三重県多気郡明和町明星)にあった伊勢街道沿の茶屋。看板のタイプとしては、板部分の幅が狭い古いものを描いている(図9―⑨)。静岡県立美術館「アニマルワールド―美術のなかのどうぶつたち―」二〇一四年に収録されており、森下佳菜氏よりご教示を得た。

「金比羅図屏風」(清信(狩野休田清信)享保二年(一七一七)没筆、香川・金刀比羅宮蔵、狩野博幸一九九二所収)

参詣道沿いの、右隻第一扇中程に、店内でうどんの生地を伸ばす姿とうどん屋の看板が、同第五扇に、看板および生地を伸ばす姿と暖簾から外を覗く女性が描か



- れている。看板は、尖頭形の板に短冊状の紙片をいくつか付けた形状である（図9-10）。石澤一志氏よりご教示を得た。
- (23) 「四条河原図巻」は、景観年代は寛文（一六六一〜七三）〜延宝（一六七三〜八一）ころだが、制作は江戸中期、元禄（一六八八〜七〇四）ないし享保（一七一六〜三六）ころとされる（切畑健による解説。高橋他一九七三）。
- (24) 林一九七七は、看板の全体的な傾向として、「時代が下がり文化度が高くなると共に、急速に文字看板に頼る率が高くなっていく」と指摘している。文字看板が主流になる背景には、当然識字率の向上がある。
- (25) 写真紹介のサイトで多くの看板類の写真も公開されており、「老照片 面店幌子」などと検索すると、二〇世紀前期頃の北京地区で用いられていた看板を多数閲覧することができる。板の部分に彫刻を施した物が多く、また短い円筒のまわりに細い布を垂らした物もある。中国における古い看板および看板研究については、陳可再氏より御教示をいただいた。
- (26) 頭の尖った形の掲示板類は、室町時代の制札と、それを継承した江戸時代の制札類に由来すると思われる（小島二〇〇五「中世の制札」参照）。管見の限りでは、日本以外では、掲示板的な物に使った例をあまり見ないが、日本では、制札以外でも、棟札、板碑、将棋の駒など、様々なジャンルにおいて鎌倉時代以降好んで使われた形であり、その起源や意味については、別途考察を期したい。
- (27) 中国の風俗画として管見に入ったものでは、明代の十六世紀前半に活動した画家仇英の作とされる「清明上河図」（大倉集古館蔵、伊原二〇一二が収載）の橋のたもと飲食店らしき店に、うどん屋看板に似た、赤い糸状の物を垂らした看板らしきものが二つかかっている。一二世紀に描かれた宋代の「清明上河図」には、このようなものは見当たらない。
- 短い円筒に房を付けた看板を、飲食店の店先に竿を突き出して掲げた光景は、清代の風俗画に見られる（金他二〇〇八所収図版など）。「清明上河図」大倉集古館本に見られる物もこの類かとも思われ、「うどん屋看板」のような、板に房を付けた麵店の看板そのものは、検討を始めたばかりだが、まだ中国や韓国の古い風俗画に見いだせていない。
- (28) 「舟木本」には、方広寺大仏殿の左上に、大坂の陣を象徴すると思われる乱闘場面が描かれており、この影響と思われる場面は、「旧萬野美術館A本（萬野A本）」、「歴博D本」、「九博本（旧高津文化会館本）」、「出光美術館蔵「江戸名所図屏風」など、かなりの都市風俗画に見られ、このような刃傷沙汰の乱闘場面を描く屏風は多数に上る。後述の路上の「後妻打ち」の場面や、本稿で扱っている「暴力的なうどん屋」など、いくつかのパターンがあると言えるが、詳しくは別の機会に述べたい。
- (29) 「福岡市博本」のこれと同じような図像は、洛中洛外図屏風「勝興寺本」にも

見られ（右隻第一扇下）、うどん屋の徴証はないが、そこでは背後の子供をかばう形になっている。おそらく、本来は子供の喧嘩に大人が介入するという図像の系譜を引くと思われるが、「福岡市博本」では、単に子供を打撃するだけの図になっている。

- (30) 洛中洛外図屏風「旧萬野美術館A本（萬野A本）」は、淀城天守の存在から寛永二年（一六二五）以降の景観とされる（京博一九九七）。「舟木本」の影響が強く、図像の借用も散見される。現在の所蔵者は確認できず、京博一九九七の図版からトレースを試みた。
- なお、「萬野A本」にも、右隻第五扇の、三条橋の両側の店に、池田本系と同じようなうどん屋の看板が認められる。

- (31) 「舟木本」に描かれた路上での後妻打の図像は、「昔々物語」などに伝えられる現実の後妻打ち、すなわち日時を通告して後妻の家を集団で儀礼的に襲う、というものとは大きく異なっている。「舟木本」は、後妻打の実態を描いたのではなく、それに仮託して謡曲「鉄輪」の一節（「いで〜いのちをとらん〜としもとをふりあげうハなりのかみを手にからまいてうつやうつの山の」）に基づく先妻の後妻への仕打ちを絵画化したものと思われる。それが二条城の近くに描かれたのは、筆者が注文主と推定する越前松平家の、徳川本家に対する意識を反映しているのではないかと考える（小島二〇一五）。その図像は「萬野A本」に借用され、また同様の図像が「九博本」（旧高津本）にもあるが、このような現実ではない後妻打の図像は、「舟木本」における象徴的な意味を離れて、単に暴力的な図像として用いられたのであろう。

引用・参考文献

〔図録・図集〕  
 高橋誠一郎・榎崎宗重監修 菊池貞夫・諏訪春雄・和歌森太郎編 一九七三『近世風俗図巻 第二巻 諸国風俗』毎日新聞社  
 武田恒夫他 一九七八『日本屏風絵集成』第一巻「洛中洛外」講談社  
 林屋辰三郎・村重寧編 一九八三『近世風俗図譜第三巻 洛中洛外（一）』小学館  
 狩野博幸 一九九二『近世風俗画3 日々のいとなみ』淡交社  
 京都国立博物館 一九九七『黄金のときゆめの時代―桃山絵画讃歌―』  
 京都国立博物館 一九九七『洛中洛外図 都の形象―洛中洛外の世界―』淡交社  
 金衛東他編 二〇〇八『明清風俗画 故宮博物院藏文物珍品全集』香港聯合書刊物流有限公司  
 奥平俊六・関口敦仁監修 二〇〇九『パソコンで旅する江戸時代の京都 デジタル洛中洛外図屏風（鳥根泉美本）』淡交社

人間文化研究機構 二〇一二「都市を描く―京都と江戸―」（国立歴史民俗博物館／

国文学研究資料館）

東京国立博物館 二〇一三「京都」

静岡県立美術館 二〇一四「アニマルワールド―美術のなかのどうぶつたち―」

京都文化博物館 二〇一五「京を描く―洛中洛外図の時代―」

【著書・論文】

坪井正五郎 一八八七『工商技芸看板考』哲学書院

堀越喜博 一九四〇『満州看板往来』日本国際観光局（ジャパン・ツーリストビュー

ロー満州支部）

林 美一 一九七七『江戸看板図譜』三樹書房

立部紀夫 一九八六『酒林小考―絵画資料を中心とした史的考察―』（『民具マンス

リー』第一八卷一二号）

立部紀夫 一九九三『絵画資料にみる酒屋の看板・酒林』（『月刊歴史手帖』第二

巻四号）

石毛直道監修 一九九九『講座食の文化 第二巻 日本の食事文化』味の素食の文化セ

ンター

水藤真・加藤貴編 二〇〇〇『江戸図屏風を読む』東京堂出版

内藤正人 二〇〇三『江戸名所図屏風―大江戸劇場の幕が開く』小学館

小川慧里子 二〇〇五『第二定型林原家本洛中洛外図屏風に描かれた布帛類について

の研究』（『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究（科学研究費研究成果報告書 代表黒田日出男）』）

狩野博幸 二〇〇七『新発見・洛中洛外図屏風』青幻舎

伊原 弘 二〇一二『清明上河図』と徽宗の時代―そして輝きの残照― 勉誠出版

飯野亮一 二〇一四『居酒屋の誕生―江戸の呑みだおれ文化―』ちくま学芸文庫

大塚活美 二〇一四『住吉具慶本洛中洛外図作品の描写内容と特徴―江戸時代中期

の洛中洛外図屏風の研究―』（『佛教学大学院紀要文学研究科篇』四二

二〇〇八『洛中洛外図屏風歴史博甲本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本』

（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一四五集）

二〇〇九『洛中洛外図屏風―東博模本』の成立事情および『朝倉本』に

関する考察』（『総合研究大学院大学』『文化科学研究』五）

二〇〇九『描かれた戦国の京都―洛中洛外図屏風を読む―』吉川弘文館

二〇一四『洛中洛外図屏風歴史博甲本の制作事情をめぐって』（小島編『洛

中洛外図屏風歴史博甲本の総合的研究』（『国立歴史民俗博物館研究報告』

第一八〇集）

二〇一五『それは誰が見たかった京都か―構図に見る洛中洛外図屏風の

系譜関係―』京都文化博物館特別展図録『京を描く―洛中洛外図の時代

―』（二〇〇五「中世の制札」（同『戦国・織豊期の都市と地域』青史出版）

【付記】

本稿は、人間文化研究機構連携研究「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」（二〇一〇～二〇一二年度、代表小島道裕）および「職人絵」を中心とする日本中世近世都市風俗画の研究」（二〇一三～一五年年度、代表大高洋司）の成果の一部である。国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館の教員と外部の研究者および総合研究大学院大学（総研大）の院生・卒業生によって行っている「都市風俗画研究会」と通称した研究会では、このテーマについて随時報告し、多くの方からご教示をいただいた。また、図版掲載に当たっては、所蔵機関各位からご配慮をいただいた。記して謝意を表したい。

（国立歴史民俗博物館研究部）

（二〇一五年一月二六日受付、二〇一五年五月二五日審査終了）